

家族を守る  
力になりたい



衆議院議員

大島あつし

PRESS MISHIN 民進党プレス民進編集部 〒100-0014 東京都千代田区永田町 1-11-1  
電話 03-3595-9988 (代表) http://www.minshin.jp  
プレス民進号外・埼玉県第6区版 民進党埼玉県第6区総支部 2016年1号 rev25  
〒363-0021 桶川市泉 2-11-32 電話 049-789-2130 FAX 049-789-2117



先日、地元の障がい者就労支援施設を訪問しました。指導される方も熱心で、皆さん、明るく、委託された軽作業に従事しています。一番の心配は、ご両親が高齢化して、子供たちの世話ができなくなることです。一生涯にわたり、一人ひとりに居場所と出番がある社会を築き上げることが政治の使命です。

安全保障法制が改定され  
自衛隊の平和維持活動の  
あり方が変わりました。これ  
までよりもリスクは確実に  
高まります。自衛隊員の  
命を守るためには、政治家  
の見識と実行力が試され  
ます。  
衆議院議員大島敦

1956年埼玉県生まれ。きたもと幼稚園、中丸小学校、北本中学校、京華高等学校、早稲田大学法学部卒業。鉄鋼会社にて14年間勤務。その後、生命保険会社にて営業職を5年間勤める。2000年6月に民主党公募候補として衆議院初当選。元内閣府副大臣。元総務副大臣。2014年12月6期目当選。外務委員会委員、科学技術・イノベーション推進特別委員会委員、憲法審査会委員。

## 政治家の決断が守った PKOでの自衛隊員の命

今、国会議員で戦争を体験した人はほとんどいません。しかし大野元裕参議院議員はイラクの首都バグダットで戦争を経験しています。大野さんの友人のイラク人女性が、お父さんを自宅前で殺されてしまった時のこと、「普通なら自宅から飛び出して路上に横たわっているお父さんの遺体にすぐりつくはずですが、実際には遠巻きにお父さんの遺体を見る事しかできませんでした。なぜならお父さんの遺体に爆弾が仕掛けられている恐れがあったからです。すぐりついたら一緒に爆破されてしまうかもしれません。戦争とはこのように悲惨な事態です」と大野議員は語ります。戦争の体験があることに加えて、外交安保、中東問題、テロ問題の専門家でもあります。だからこそ、2012年に日本のPKO部隊をゴラン高原から撤収させるという判断もできたのでした。もし撤収させなかったら、オーストリアの部隊と同様に銃撃されて日本人の犠牲者が出た恐れがありました。大野議員の判断で、日本のPKO部隊は間一髪で助かったのです。自衛隊のPKO(平和維持活動)について考える貴重な経験と思い、今回、大野議員にインタビューを行いました。

### ●大野元裕参議院議員に聞いた

#### “ゴラン高原での自衛隊のPKO”

——イスラエルとシリアの間のゴラン高原の場合、危険地域ではないとされていましたね。

大野：PKOにおいてもゴラン高原は世界で一番安全だといわれていました。1996年から18年にわたって合計34の自衛隊の部隊が派遣されたのです。ところが、2010年暮れから中東や北アフリカで始まった「アラブの春」(大規模な反政府デモを中心とした騒乱)の煽りを受けて2011年からシリアの政情も不安定になってきました。それで2012年の後半にはゴラン高原でもIED(簡易手製爆弾)などが仕掛けられるようになってきたのでした。私はもともと中東の専門家であり、シリアにも住んだ経験があるので、シリア情勢は絶対に良くなれないと確信したのです。

しかも当時、私は防衛大臣政務官兼内閣府大臣政務官で、内閣府ではPKO担当でした。ゴラン高原にいた自衛隊の部隊は60人ほどでしたが、その隊長からテレビ電話を通じて現地の状況を訊くことにしました。隊長は40歳くらいだったでしょうか。テロリス

トが難民を装っていたとか、ゴラン高原からテロリストの撃ったロケット弾が、イスラエル側に落ちたなどという話もあり、やはり、不安を感じているのがわかりました。3週間くらい頻りにテレビ電話で会話したのですが、平静さを保ちながらも、事態が逼迫してきたことがひしひしと伝わって来ました。——それで大野さんも現地に行くことになったわけですね。

大野：すでに12月になっていたのですが、あのときは、通訳の費用を切り詰められてしまったため、現地では私自身がアラビア語や英語をしゃべる羽目になりました。また、シリアに着いた朝、ゴラン高原の入口で銃撃戦があったとのこと、そこでゴラン高原行きの中止を求められたものの、時間を無駄にできないので押し切ってゴラン高原に入ったのです。ゴラン高原の自衛隊も含めたPKO部隊の司令官はインド人でした。しかし、この司令官にすべてを委ねる判断はできませんでした。私は政治家として、日本の部隊の安全を危惧して撤収すべきと判断したのでした。

——部隊を撤収させることへの各府省の対応は、すんなりいったのですか。

大野：ゴラン高原からの部隊の撤収はまず防衛大臣に進言しました。防衛大臣の同意は得たものの、当時のゴラン高原への自衛隊派遣には、内閣府、外務省、防衛省の3つが関わっていました。防衛省と内閣府は問題なかったのですが、外務省は最も積極的にPKOを推進していましたから、外務省を説得しなければなりません。それで私が外務大臣に対して膝詰め談判し、最後は外務大臣から「総理が撤収を認めるなら外務省も従う」という言質をもらうことができたのです。

その直後、すぐにゴラン高原の部隊には「以後、基地の外に出るな」という指示を出

しました。実はこのときにはオーストリアの部隊が日本の輸送部隊と一緒にシリアの首都であるダマスカスへ行くという要請があったのですが、この要請も断ってもらいました。このオーストリアの部隊が単独でダマスカスに行ったところ、途中で兵士2人が撃たれてしまい、1人死亡、1人重体という悲惨な結果になったのです。オーストリアの部隊には申し訳ありませんが、日本の立場からいうと日本の部隊の撤収は本当にぎりぎりのタイミングでした。

この後の12月21日に総理の承認をもらって防衛大臣が正式にゴラン高原からの撤収を部隊に命じました。部隊の全員の撤収が完了したのが翌2013年1月15日です。

——まさに間一髪でしたね。一緒に行ったらオーストリアの部隊の代わりに日本の部隊が被害に遭っていたかもしれません。

大野：オーストリアの部隊もそれで死者が出てしまったので、国内の世論が沸騰して日本の3ヵ月ほど後に撤退を決めました。

——ゴラン高原のようにいくら安全とされている地域であれ、状況は突然ガラッと変わることがあるのですね。

大野：特に中東のような不安定な地域では現地にいて変化を把握するのはなかなか難しいといえます。

また、自衛隊の皆さんは、日々、厳しい訓練を行い、与えられた任務については、最後まで完徹することを決意しています。国際貢献についても、高く評価されています。しかしながら、今回は、私たちが政治の責任において撤収をすべきかどうかを判断する必要がありました。ゴラン高原からの撤収は、政治の責任で判断して決めたといい点で成功だったと思います。それに総理や大臣を動かせるのはやはり政治家だけなのです。